

シリコノオマロの毛を剃って　く才の神峠く

桜峠を降りて、しばらく桜川沿いの平地を歩くと白子沢の村に着く。バード達がここを通る1200年ほど前、この一帯にはまだ蝦夷と呼ばれる民族がたくさん住んでいた。アイヌ民族ともいわれる。白子沢には、大和朝廷が蝦夷を征服し、同化させるために、城柵という出城が作られていた。この出城には、大和朝廷に協力する蝦夷も住むようになり、異民族が同居していた。



バードが通るころは、すでに置賜郡（おきたまぐん）という漢字が当てられていたが、日本書紀には優者曇郡（うきたむのこおり）とアイヌ語の表現が残っている。

紀元689年1月3日。蝦夷の脂利古（シリコ）の息子の麻呂と鉄折（カナオリ）という若者の髪を剃って、お坊さんになりたいと大和朝廷に願い出た。

大和朝廷の答えは

「麻呂たちは、幼く若くとも、優雅で、欲が少ない。しかも、これまで肉食を發って、野菜や山菜を食べて、訓戒を守っている。請願するままに、出家して仏道修行にはげみなさい」

というものだった。仏教は蝦夷同化の手段としても使われていた。キリスト教が世界の植民地支配に使われたように。蝦夷の脂利古（シリコ）とは白子沢と言われる。

「おい、シリコノオマロ、この正月の雪空に頭を剃って、風邪を引くんじゃねえぞ」

「そういうカナオリだって、ツルツルだべ」

そんな会話が、1200年前、この地で交わされたかもしれないなどということは、バードたちにとっては知る由もない。白子沢は、このころ街道沿いに店や旅館が並ぶ宿場としてにぎわっていた。

白子沢で牛の代わりに馬を借りたバードは、その馬に乗って、再び山道を歩き出した。最初の峠は、才の神峠。この峠には「境の神」地蔵がまつられ、それが才の神峠の名前の由来となった。